

“信用日本一”を追求



第17代 松井 角平社長

松井建設が創業440周年を迎える。これを機に4月10日付で第17代松井角平を襲名する松井隆弘社長は、「幾多の困難を乗り越えながら企業体質を強化し、持続的に成長してきた」と同社の歴史を語る。いつの時代も経営の根幹にあるのが社は「信用日本一」であり、「規模を追うのではなく、信用で日本一になる」との思いは揺るがない。その上で「質素・堅実・地道な社風を維持し、本業に徹するとともに、経営環境の変化に敏感に対応していく」と強調する。今後も社寺建築を軸に据えつつ、変えるべきところは柔軟に見直し、次の450年、500年に向けて歩み続ける。

社寺建築を軸に歴史刻む

同社は1586(天正14)年、初代松井角右衛門が加賀2代藩主・前田利長公の命で越中守山城を普請したことを起源に創業した。前田家18代当主の前田利祐氏によると、社寺建築への取り組みが戦国時代に武士・農民

使命を胸に東京進出

富山を拠点に全国で社寺建築を手掛けてきた同社に転機が訪れたのは1923(大正12)年。松井社長の祖父に当たる第15代松井角平の時代、新橋演舞場の設計監理を手掛けるも、施工中に関東大震災に遭遇した。角平は、がれきの山と化した東京を前に「帝都復興こそが建設業者の使命」との思いを強め、一族の猛反対を受けながらも、松井組東京出張所を開設し、東京進出を果たした。31(昭和6)年に代表的な施工物件である築



築地本願寺本堂

・商人の心の平穏を取り戻す役割を担っていたのではないかといい。地本願寺に着工し、34(同9)年に竣工した。現在も92年ぶりとなる本格的な大改修工事に携わっている。

39(昭和14)年には会社組織「株式会社松井組」とし、社寺建築技術の伝承・育成に注力する一方、一般建築にも事業領域を広げた。15代角平の時代には、米国からコンクリートブロックの製造技術を導入するなど、新技術を積極的に採用し、総合建設業としての基盤を築いた。

松井社長は「440年の歴史の中で、数え切れないほどの危機や経営環境の変化があった」としつつ、「危機のたびに体質を強化し、成長を続けてきた」と力を込める。例えば、戦後不況では財務体



瑞泉寺 太子堂

質を強化。オイルショック時の総需要抑制策に対しては、受注の大半を占めていた公共工事から民間工事へとシフトした。現在では7、8割を民間工事が占める。東日本大震災では、本社を含む全国の支店が連携し「オール松井」で対応。この体制が定着した。

伝統と最新技術

450周年に向けては、本社のビル建て替えを検討している。2025年にプロジェクトチームを発足し、「社員が自社したくなる、時代の変化や自然災害に対応できる」社屋の実現を目指す。

働き方改革にも一層取り組み。労働時間やコストの削減を図るため、27年4月から新たな基幹システムを全社で稼働予定だ。また、「生産性向上の基盤



定樹山 大建寺深見五重塔

は社員の健康から」との考えから、ウォーキングアプリの導入など健康増進への取り組みも推進する。襲名に当たり松井社長は、「歴史の重みを感じ、身の引き締まる思い」と語る。「質素・堅実・地道の社風は社寺建築に由来する」といふように、社寺建築を核とする伝統を守りつつ、最新技術とのバランスを図る。「建設業は立地や形状が全て異なる一品生産であり、新技術やデジタルツールと手作業の最適な組み合わせを追求していく」重要性も説く。企業理念である「人・仕事・会社を磨き続け、建設事業を通じて社会に貢献する」を実践し、変化に柔軟に対応しながら顧客満足度を追求することで、「信用日本一」を実現し続ける。

1586年	初代松井角右衛門が加賀2代藩主・前田利長公の命により越中守山城(富山県高岡市)を普請
1593年	伏見城普請、井波町(富山県南砺市)の瑞泉寺再建。以来、社寺建築を中心に施工を担う
1923年	第15代松井角平の時に松井組東京出張所を開設し、東京進出。一般建築にも業容を拡大して総合建設業としての基盤を築く
1934年	築地本願寺竣工
1939年	株式会社松井組を設立
1948年	松井建設株式会社に社名を変更
1953年	港区田村町(現在の西新橋)に本社ビルを構える
1972年	中央区新川に新社屋を構えて移転
2026年	創業440周年

440年の歩み

